法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-08-31

<追悼文>思い出二題

多和田，眞一郎

(出版者 / Publisher)
法政大学沖縄文化研究所
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
琉球の方言
(巻 / Volume)
18-19
(開始ページ / Start Page)
44
(終了ページ / End Page)
45
(発行年 / Year)
1995-02-24

Hosei University Repository

思い出二題

多和田　眞一郎

金曜日の朝、のんびりと新聞を読んでいた。一通り目を通してきて、終わりに近い「訃報」の欄に何気なく目をやって、「えっ！」と声を出してしまった。（近くにいた妻が「どうしたの？」と驚いたくらいである。）そこに「中本正智」という文字を見たのである。

「のんびり」は、消えた。新幹線の切符の手配、ホテルの予約。それが済んで少し落ち着いたら、急に寂しいような、悲しいような、何とも言えない感情に襲われた。そして、中本さんに関するいろいろな思い出が……。

［特別講義］

90年１月の末に、留学生達のための特別講義をお願いし、広島まで来ていただいたことがあった。「日本語・日本文化」を専攻している十数名のための講義で、「日本語を通して見た文化」という題であった。

手術の後、すっかりお元気になったと聞き、講義のお願をしたのであった。お忙しかろうし、それも東京からは大分遠い広島へ、わざわざお出でいただけるか不安な状態で恐る恐るお願いしたのであったが、「喜んで」とおっしゃってくださった。

この特別講義は、頗る評判が良かった。留学生達は、新鮮な驚きを覚え、知的好奇心を喚起されたようであった。お呼びした私は、鼻高々であった。

「講義・演習」（授業）は、相互作用であると言われるが、正にその通り、中本さんも、留学生達の反応に感動されたらしく、約一週間後、お手紙をくださった。お呼びしたことへの礼、留学生達が熱心で感心したこと、「あのような留学生達を教えている多和田さんは幸せ」だなど、心暖まることがしたためられていた。

今にして思う。あれは、お礼の形を借りた、私への励ましの、あるいは応援のお手紙であったのだ。「現状に対する不満」で「ストレス一杯状態」にあった私への。講義終了後お供した「飲み会」で、気のおけない先輩に愚痴を漏らしたに違いない（記憶は定かでないが）。私の置かれた立場を察知し、適切なアドバイスをくださったのである。

適切なアドバイス。十数年前には、そのお陰で「救われた」ことがある。

［調査旅行心得］

十数年前、ある高名なグループの言語調査旅行の一員に加えてもらったことがある。有力

Hosei University Repository

なメンバーがいろいろな事情で抜け、ピンチヒッター的に私が選ばれたのである。その事情を承知した上で参加を決意した。一人ではなかなか行けないからという幾分打算的判断も加わって。それでシッペガエシを受けることになるが。

調査旅行に出かける二・三週間前だったか、ある研究会の帰りだったと思う。中本さんに「飲みに行こう」と誘われた。途中までいっしょの人もいたが、誘われたのは私一人であった。中本さんとは何度か飲んでいるが、二人だけで飲んだのは、この時だけではないか。

四方山話の中にちりばめられた調査旅行の話。「グループ」の特徴・行動パターン、予想される出来事、対処の仕方などについて伺うことができた。

「その時」は、意外に早くやって来た。現地について三日目か四日目であったと思う。夕食後の「調査反省会」である。事前には何も知らされず、その場で私の番になっていることを知る。

調査結果資料の検討・吟味という名目であったからそのつもりで受け答えしていたが、途中から雲行きが怪しくなった。「空気」が違う。反省会というよりは、(私の)「調査能力判定会」である。さらにいえば「総括」である。自慢ではないが、この種の「空気の変化」には鈍感ではない。二・三週間前のアドバイスを思い出し、「なるほど。これか」と肝が据わった。「攻撃」には「攻撃」で応ずるしかない。それについては日々学習しているところであった。「就職」したてのころで、生意気な新人は、いろいろと「実社会」の「訓練」を受けている最中であった。「会議」の場が絶好の「訓練場」であった。それに比べれば、今、目の前に展開している「現実」は、さほどきつくはなかった。言語の調査能力云々では明らかに私より劣ると思われる者までが、「総括」する側に回り興奮している様を見て、可笑しささえ感じた。「無事」に切り抜けることができた。その後、妙な自信のようなものまでついていた。

そうは言うが、中本さんの適切なるアドバイスがなければ、どうなっていたことか。不意をつかれ、パニックに陥って「グループ」脱落という憂き目を見ていたかもしれない。グループ脱落はいいとしても、なけなしの自信まで喪失していたかもしれないのである。

ところで、広島にお呼びしてから一年ぐらい経過したころであったか。風の便りに、中本さんが入院なさったと聞いたが、大事を取っての入院であろう、あの頑健な中本さんのことだからすぐ退院なさるに違いないと思った。学会などですぐお目にかかれるようになるはずだと思っていた。

ところが……90年1月にお会いしたのが最後ということになってしまった。そういう訳で、私の記憶の中には、お元気な時の中本さんの姿しかない。その中本さんに申し上げる。

「大分、寄り道をしましたが、やっと自分の進むべき道を見いだしましたので、その方向に邁進します。」

「ミーマンティ　ウタビミソーリ」　　(広島大学教授)